



### 短歌募集

- ▲課題 随意 ▲切 毎月末日 ▲發表 本誌上
- ▲賞品 三座に粗景 ▲選評 眞宮起雲
- ▲投稿 用紙隨意左記の處に送らるべし、但添削返稿は往復葉書又は印紙封入の事

伊勢國白子局區内 みどり短歌會

○當撰發表

(地位)戀愛詩評釋

一部 愛知伊藤 天郎君

(人位)佛教文藝十二傑

一部 埼玉鹽野まづ子君

### ◎短歌

眞宮起雲選

(地)

愛知伊藤 天郎

飢に泣く兒をふところに霜の夜を貰ひ乳する我  
瘦せにけり

(人)

埼玉鹽野まづ子

なまぐさ荒野のかげの身にしてみて屍をてらす

評、一語物凄く覺え戰慄するの感あり

○

平岩 繁治

あさ露の重さにたえで白萩のなびけるすがた繪  
にしても見む

港川賤が男の子の名に榮えてながる、水にさく  
にはふなり

○ 鹽野まつ子

靴はらふ荒野のすまに月すみてころも手さむし

雁のひと聲

さらぬだに秋としいへば淋しさを小雨ふる夜の

寺すまゐ哉

たましくに訪づれ來つる伯母の寺奇しき香充て

り白菊の花

看經の伯母のすがたにそと泣きぬ泣きては時の

魔にぞ恐れぬ

○ 飯塚 曉 霞

世を恨み人を妬まむはかな世とかこつ人の子う

ら若うして

山をこえ川を渡りて秋の旅はぎ咲くやとにかり

のこゑさく

はぎ寺のつきかけ清き鐘樓のわかき御僧のひと

りうたよむ

○ 林 静 子

悶えもつ身はふばしまに朝夕を歌も綴らずかく

て老い行く

許しませ賜びしみ歌にむくゆべき笑み清からぬ

人妻の身よ

○ 柴田 紫 竹

あささめの夕べ悲曲を奏でます友のたか窓とも

しびはそき

しら菊にひとみこらせば我ながら神ならぬ身の

神と覺えつ

○ 竹尾 玉 枝

朝の氣のさむら身に泌む窓の外にさよさをほて

る白菊の花

○ 井上 好 吉

曇りなき月に我身のいまさらをかこつ夜寒う雁

のこなきく

○

高木紅玉

亡き母が小照出して泣く窓につめたくちりぬ山

茶花のはな

○

吉野絹子

菊ぞのにまばゆく灯入れまゝとゐして妹のまひを

母の贅する

草枯れし野中におはす地蔵尊かまかげやせて亡

き父に似ぬ

○

白浪子

やはらかき白羽の鶴にふみつけて物言ひさかす

小春日の椽

竹の扉はまだ閉されて白菊のまがをもるゝこと

の音はそき

吟せんに歌なくはてんわが思ひ氷るがごとし冬

の夜のつき

明けがたの夢のなごりを止めたるかもむきあり

な白菊の花

○

起雲

唱ふれと和する人なき淋しみを獨興がるわれや

せにけり

めぐまれし真綿を肌にあから歌ふもひするとも

し火の前 (さる人に)